

今週の為替相場見通し(2017年3月21日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		112.57 ~ 115.19	112.73	110.50 ~ 114.50
ユーロ	(ドル)		1.0600 ~ 1.0782	1.0738	1.0600 ~ 1.0900
(1ユーロ=)	(円)		120.82 ~ 122.88	121.04	119.00 ~ 123.00
英ポンド	(ドル)		1.2110 ~ 1.2405	1.2396	1.2250 ~ 1.2500
(1英ポンド=)	(円)	*	138.57 ~ 140.61	139.70	138.50 ~ 141.00
豪ドル	(ドル)		0.7534 ~ 0.7720	0.7702	0.7650 ~ 0.7800
(1豪ドル=)	(円)	*	86.42 ~ 87.49	86.80	86.00 ~ 88.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

為替営業第二チーム 鶴田 涼平

(1) 今週の予想レンジ: 110.50 ~ 114.50 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

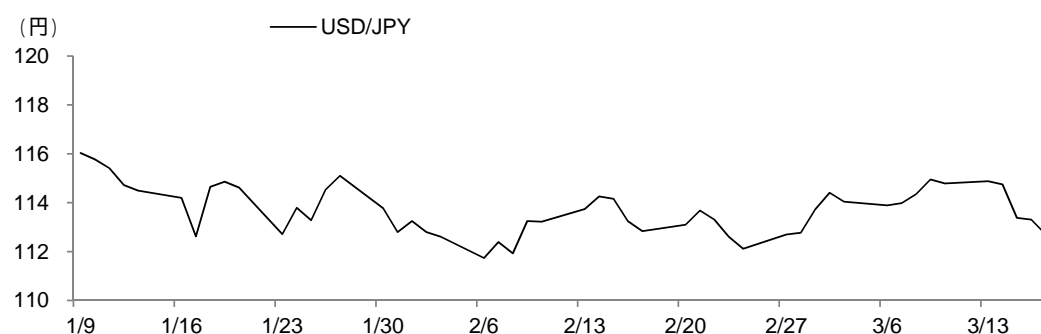
先週のドル/円相場は週後半に下落する展開。週初13日、114円台後半でオープンしたドル/円相場は、高水準にある米長期金利や堅調な米株にサポートされ114円台後半での底堅い展開。14日にかけてドル買い地合いとなる中、米長期金利の上昇も相俟ってドル/円は一時週高値となる115.19円まで上昇するも、欧州株の軟調推移や米長期金利が上げ幅を縮小させたことなどを背景に114円台半ばまで軟化。15日、注目されたFOMCでは市場予想通り0.25%の利上げが決定されるも、メンバーの政策金利見通し(ドットチャート)では2017年の予想利上げ回数が前回(12月13~14日)と変わらず3回となった。事前にドットチャートの上方修正に期待が集まっていたことから、本結果が嫌気されドル売り優勢の流れとなり、ドル/円は113円台前半まで急落。16日、オランダ下院選挙を巡っては出口調査で現与党・自由民主党が第一党となる見込みとの報道に極右政党・自由党台頭への警戒感が緩む中、ドル/円は113円台前半で上値の重い展開。その後、ドル/円は112.91円まで下落するも、安値圏では押し目買いの動きも散見される中、米長期金利の上昇も相俟って113円台前半まで反発。17日、米3月ミシガン大学消費者信頼感指数でインフレ予想値が大幅に低下するとドル/円は一時週安値となる112.57円まで下落し、結局112円台後半で越週した。

今週のドル/円相場は上値の重い展開を予想する。先週の注目イベントであるFOMCでは年内利上げ回数の中央値は3回と前回から変わらなかった。市場参加者の利上げペース加速に対する期待感を後退させる内容となり、ドル/円は一目均衡表日足の雲を上抜けできないまま失速。16日(木)に公表された米予算方針では特段目新しい材料は示されず、トランプ政権の掲げる経済政策や税制改革などの具体化は先延ばしとなり、こちらもドル/円を押し上げる材料とはなっていない。週末にかけて開催されたG20財務相・中央銀行総裁会議の声明文では、貿易政策に関し「保護主義に対抗する」との一文が削除され「米国第一」を掲げる米国の主張が色濃く反映された。米貿易赤字是正へ向けたトランプ政権の強硬姿勢など、今後の通商政策に懸念を残す結果にドル/円は更にレンジを切り下げている。重要イベントを通過し、目先のテーマに乏しい状況下で、トランプ政権の保護主義政策推進への警戒感や先行き不透明感が高まる展開にドル/円は基本的に上値の重い推移となるだろう。今週は23日(木)のイエレンFRB議長講演を始め、複数のFRB高官による講演を予定しているが、FOMCを終えたばかりで、再び利上げペース加速の観測が高まり、ドル買い材料とされる発言が出るとは考えにくい。

(3) 先週までの相場の推移

先週(3/13~3/17)の値動き:

安値 112.57 円 高値 115.19 円 終値 112.73 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

為替営業第二チーム 下山 泰典

(1) 今週の予想レンジ: 1.0600 ~ 1.0900 119.00 ~ 123.00 円

(2) ポイント[先週の回顧と今週の見通し]

先週のユーロ相場は対ドルでは週後半にかけて急伸する一方、対円では週を通して上値の重い展開。週初13日、対ドルでは1.06台後半で、対円では122円台半ばでオープン。スметツ・ベルギー中銀総裁の「最新の経済予測の上方修正は、金融政策の出口を意味するものではない」との発言に1.06台半ばで上値重く推移。なお、対円では週高値となる122.88円をつけた。翌14日は、フランス大統領選挙に関し、フィヨン候補が家族への公金不正支払い問題で訴追されることが報じられると、極右候補であるルペン氏勝利への懸念が強まり、ユーロ/ドルは一時週安値となる1.0600まで下落した。15日は、FOMCにおいて市場予想通り0.25%の利上げが決定されるも、ドットチャートが上方修正されなかったことによる失望感からドル売りが強まり、ユーロ/ドルは1.07台前半まで急伸。16日にかけてドル売り地合いが継続する中、オランダ総選挙では与党の自由民主党が政権を維持する見通しとなったことや、ノボトニー・オーストリア中銀総裁によるECBの緩和縮小を示唆する発言を受けてユーロ買いが強まると、ユーロ/ドルは1.07台後半まで上昇した。17日にかけてユーロ/ドルは一時週高値となる1.0782まで上昇。しかし、フランス大統領選挙の候補者支持率の速報でルペン氏が首位を維持していることが伝わるとユーロ売りが進行し対ドルで1.07台前半まで下落、対円では一時週安値となる120.82円まで下落。その後もユーロは上値重く推移し、対ドルで1.07台前半、対円では121円台前半で越月した。

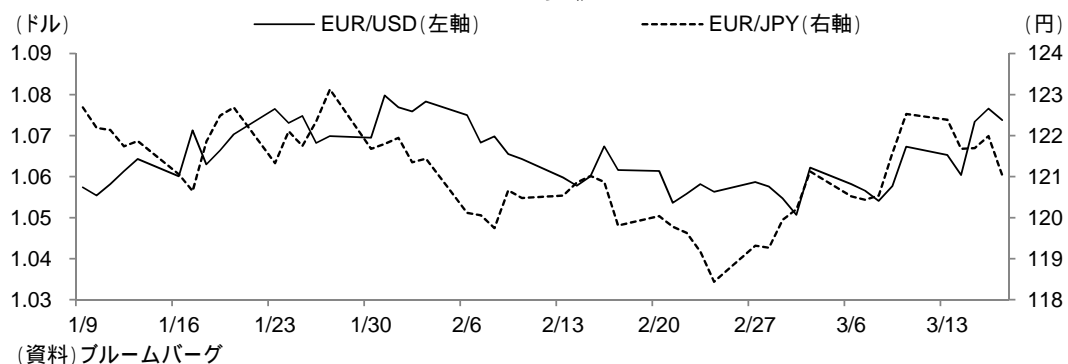
今週のユーロ相場は徐々に上昇する展開を予想する。週末に行われていたG20財務相・中央銀行総裁会議では、反保護主義に関する文言が削除されたが、具体的な取り組みは7月のG20首脳会議で決定するという結論になったことから相場への影響は比較的限定的となった。今後の相場を考える上では、足許は一旦材料が無くなっている状況。かかる中では、期末でもあり実需に基づく相場動向を考えておきたい。ユーロ圏は世界最大の経常黒字を計上しており、今後は徐々に期末の「リパトリ」（本国送金）などを背景としたユーロ買いにサポートされる展開も考えられる。また、ECB高官からタカ派的な発言も聞かれており、それもユーロをサポートし得る。仏大統領選挙などを巡ってネガティブな報道があればユーロ売りとはなるが、基本的には底堅い値動きを保つ中、徐々に上昇する展開を予想している。

(3) 先週までの相場の推移

先週(3/13~3/17)の値動き:

(対ドル) 安値 1.0600 高値 1.0782 終値 1.0738

(対円) 安値 120.82 高値 122.88 終値 121.04



3. 英ポンド

(1) 今週の予想レンジ: 1.2250 ~ 1.2500 138.50 ~ 141.00 円

(2) ポイント[先週の回顧と今週の見通し]

先週の英ポンド相場は、小刻みな上下動を繰り返しながら、対ドルで上昇、対ユーロでも小幅上昇した一方、対円では概ね横ばいとなった。週明け13日の主要通貨市場は、ユーロの反落で始まった。前週の欧州中銀ドラギ総裁の発言「(物価安定を脅かす)リスクに対するバランスは改善した」「期限の切れるTLTROに関しては(再導入の)議論の必要さえなかった」などが、金融緩和の引き揚げに前向きと読まれたことで進んだユーロ高は、13日、ベルギー中銀スメッツ総裁の発言を受けて反落に転じた。同総裁は「最新の(欧州中銀の)経済予測の上方修正は金融政策の出口を意味するものではない」と近い将来の段階的な金融緩和撤回(テーパリング)の可能性を否定した。13日には、スコットランドのスタージョン行政府首相が、スコットランドの独立を問う国民投票実施をスコットランド議会に諮り、英政府に申請すると発表。この発表自体、相応の意外感を持って受け止められたものの、この時点でポンドへの影響は読み取れなかった。ポンドが全面安に転じたのは翌14日の欧州時間朝で、3月1日に就任したばかりの、英中銀ホッグ副総裁辞任の報がきっかけだった。15日には注目された米連銀公開市場委員会(FOMC)の結果が発表されたが、25b.p.の利上げは既に概ね織り込まれており、同委員会の予測する将来の政策金利見通し(所謂ドットチャート)にも目立った変更がなかったことで、ドルは全面的な調整安へと推移した。続いて16日、英中銀金融政策委員会は予想通り基準金利、資産購入額上限共に据え置きを発表。フォーブス委員が利上げ票(+25b.p.)を投じたのは意外だったものの、ポンドの上昇は小幅かつ、一時的にとどまった。

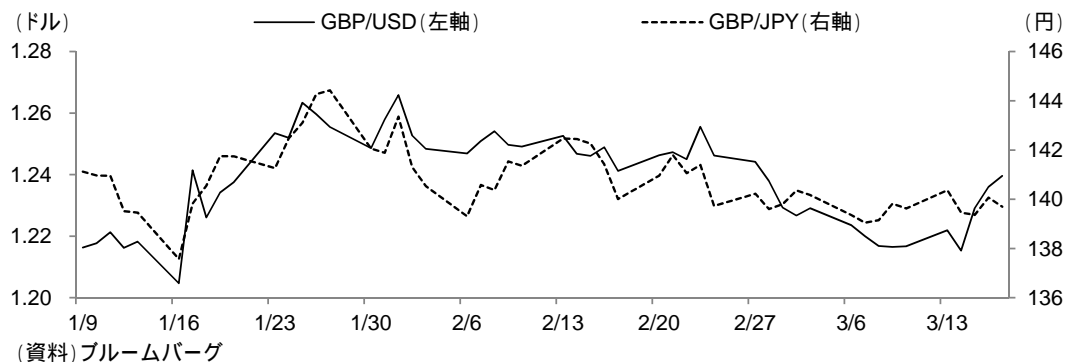
今週の英ポンド相場は、対ドルで頭打ちから反落、対ユーロ、対円では方向感を欠いた横ばいを予想。米連銀による利上げの織り込みは、既に十分に進んでいるとはいえ、金融引き締めで明らかに先行している米の通貨を、更に積極的に売り込むには無理を感じる。また、ポンド側に、安心して買えない粗が目立つのも、対ドルでの頭打ちを見込む要因。英政府は月末までにリスボン条約50条(離脱条項)を発動すると見られるが、この大事な時期に、1週間前に発表した予算の主要項目(自営業者に対する社会保障納付金引き上げ)の撤回を強いられ(15日)、スコットランド独立投票の対応に追われたりと、政権の安定には程遠い。英中銀も、任命したばかりの副総裁が僅か2週間で辞職を強いられ、この6月で退任する委員からとはいえ、見ようによっては「造反票」ともとれる利上げ票が投じられたり、市場の信頼感を勝ち得るには些か心許ないのではないかと。スコットランド議会は、今後、2018年秋から2019年春の独立投票実施を目指して議事に入るはずだが、仮に同時期に投票となれば、英政府はEU離脱交渉が佳境を迎えるのと同時に、スコットランド国民の慰留にも動かなければならなくなる。ただでさえ、並行してEU以外の国との貿易交渉まで進める必要があるところ、どこをどうひねっても時間も人材も捻出できるとは思えない。今週は21日(火)に英2月消費者物価指数(CPI)、英2月財政収支、23日(木)に英2月小売売上高などの英主要経済指標の発表が相次ぐが、上述フォーブス委員の利上げ票を受け、警戒されるのはやはり物価の上振れか。もっとも、足元物価が多少上振れようと、英中銀金融政策委員会の大勢が早期利上げに傾く可能性は現時点で考え難い。ましてや、それがポンド相場に影響(敢えて想像するならポンド押し上げ方向か)するとも考え難い。

(3) 先週までの相場の推移

先週(3/13~3/17)の値動き:

(対ドル) 安値 1.2110 高値 1.2405 終値 1.2396

(対円) 安値 138.57 高値 140.61 終値 139.70



4. 豪ドル

為替営業第二チーム 山本 一暁

(1) 今週の予想レンジ: 0.7650 ~ 0.7800 86.00 ~ 88.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル/ドル相場は横ばい推移後、週後半に上昇。豪ドル/円相場については週を通してレンジ内で推移した。週初13日、0.75台半ばでオープンした豪ドル/ドルは、日中は特段材料のない中、前週末のドル売りの流れを引き継ぎ、やや買い優勢の展開。しかしながら、週末に開催されるFOMCを前に様子見姿勢が強く、0.76台には届かず0.75台後半での揉み合いとなった。14日、欧州時間では0.75台前半まで軟化する場面が見られたものの、下値追いとはならずすぐに0.75台半ばに値を戻し、再び揉み合い。石油輸出機構(OPEC)月報にて昨年の減産合意後もなお原油在庫が増加したことが示され、また非加盟国の今年の生産量見通しが引き上げられたことを背景に、原油先物相場が下落。ただし、その影響は限定的で、FOMCを控えて積極的にポジションを傾ける地合にはなく、引き続き0.75台半ばでの膠着状態となった。15日東京時間・欧州時間はポジション調整の豪ドル買いが優勢となり豪ドル/ドルは0.75台半ばから後半までじり高。この間、豪ドル/円は豪ドル/ドルとドル/円が双方向の動きとなるなかで、86円半ばから87円ちょうど近辺の比較的狭い値幅でレンジ内推移した。注目されたFOMCは市場予想通り25bpの利上げを決定するも、ドットチャートの中央値が年内3回利上げから変更されなかったことを受けて、市場は米債上昇(米金利は低下)、ドル全面安で反応。豪ドル/ドルは0.75台後半から急伸し節目の0.77ちょうどを上抜けると、一時、週高値となる0.7720をつけた。翌16日、オーストラリア2月雇用統計は失業率、雇用者数変化ともに市場予想比悪化し、豪ドルは売り戻しが先行。FOMC直後の急騰分の利益確定売りも入ったと見られ、0.77台前半から0.76台後半までじり安となった。その間、豪ドル/円についても、FOMC後の高値圏である87円台半ばから86円台後半まで反落した。同北米時間には米予算教書が公表されるもFOMC通過後、為替市場のボラティリティが急速に落ちるなかで特段材料視される内容はなく、翌17日の豪ドル/ドルは0.77付近で、豪ドル/円は87円付近で小幅推移し越週した。

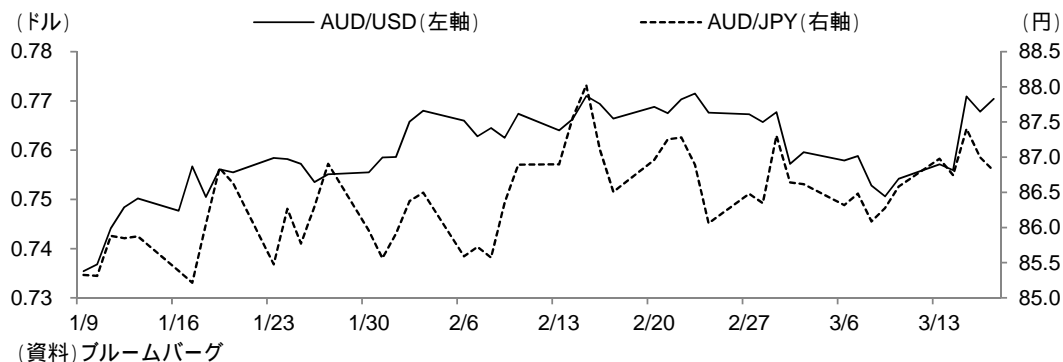
今週の豪ドル相場は揉み合い推移を予想する。経済イベントとしては21日(火)の3月豪州準備銀行(RBA)議事要旨公表(3月7日の会合分)以外、目立ったものは見当たらない。また、先週のFOMC、米予算方針、G20財務相・中央銀行総裁会議などの重要な政治・経済イベントを通過後、為替市場においては通貨・期間にかかわらず全般的なボラティリティの低下が顕著であり、積極的にポジションを一方に傾ける市場参加者は限られそう。豪ドル/ドルに関しては、目先は米利上げペース加速化期待が剥落したことから豪ドル買いとなりやすい一方で、着実な米利上げが見込まれる中、米ドルを積極的に売る地合にもない。したがって、明確な方向感はないことが見込まれ、しばらくはレンジ内での推移になりそう。豪ドル/円についても先週同様に、豪ドル/円は豪ドル/ドルとドル/円が双方向の動きとなるなかでは、比較的狭いレンジでの揉み合いを予想する。

(3) 先週までの相場の推移

先週(3/13~3/17)の値動き:

(対ドル) 安値 0.7534 高値 0.7720 終値 0.7702

(対円) 安値 86.42 高値 87.49 終値 86.80



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。